

## 最近のイラクでの調査および文化財保存について

ヨハーナ, G. ドニー

Present Situation of Archaeological Research and  
Preservation of Cultural Assets in Iraq

Donny G. YOUKHANNA

今日はイラクでも非常に有名な中近東文化センターで話をする機会を持つことができ、非常に光栄に思っています。湾岸戦争が終了して以降9年ぐらゐの間に、イラク国内ではバスラやナスリアなどで、のべ5千点にもものぼる考古遺物が盗掘され、海外に流出しているという現状が、現在のイラク考古学関係者を悩ませています。

この問題は特に近隣諸国からの要請もあって盗掘が行われるという、一種の政治的な問題にも発展しています。このような問題に対して、私達イラク考古学研究者は、ひとつには通関で海外への持ち出しを防ぐことを徹底してやっています。もうひとつは問題の起きそうな遠隔地の遺跡で、我々自体が発掘調査をしながら長期滞在して、こういう問題が起きないように努めています。

1999年時点で25の遺跡が掘られています。これからお話しするウム・アル・アガリブの名前は、サソリの多く存在する場所という意味ですが、そこは私が直接、発掘主任として参加した遺跡であり、これから紹介したいと思います。

これは南メソポタミアの遺跡の標準的な風景ですが、ここに見えますように穴が開いています。これが最近の湾岸戦争以降の盗掘の痕跡です。先ほどお見せしました2番目の遺跡がウンマという遺跡ですが、これはウム・アル・アガリブの航空写真です。そしてこのスライドの上に先ほどのウンマという遺跡があり、この真ん中がウム・アル・アガリブで、それらを結ぶものとして、古代の運河エトウルンガルというものが存在しました。ウム・アル・アガリブの周辺には、非常に有名なウルクとかニップールとか多くの有名な遺跡があり、場所的にはシュメールランドの中心地に属しています。これはロバート・アダムス教授が作った地図ですが、ここにウンマやウンマ・アル・アガログという遺跡があります。

ウンマは今、イラク国立博物館の館長をやっているノワール博士が調査しており、私がウム・アル・アガリブを掘ったわけですが、2001年、今年からは別の遺跡を発掘しています。ウンマ・アル・アガログは5 km<sup>2</sup>の広さを持ち、中心の高さは比高20mです。ここに見えます囲いは政府が洪水から遺跡を守るために最近作ったものです。

この遺跡では2年間にわたって7回、7トレンチを発掘したわけですが、オペレーション1からオペレーション7

という名前が付けられています。先ほど示しました場所は、ウバイド期の表採遺物があったので、時期を確認するために2 mほど掘っており、現在そろそろウバイド期の土器が出土するところです。

これはオペレーション1という所の発掘で、建物の痕跡は少ないのですが、排水遺構が非常に特徴的な所です。これがオペレーション2という所の発掘地点で、2つの層から建築層から出来ており、上の方がED(初期王朝)3期、下の方がED2期で、その根拠となりますのがプラノコンベクス状のレンガの胎土の違いです。それで最初のED2期の建物はほぼ完璧に残っていて、一番上の所から新たな上の建物が作られているのがわかります。これは最初に見つかった、持ち送り式レンガ積みによる入口のものです。このOHPでお見せしているのが先ほどのスライドの説明になります。これは見てわかると思いますが、プラノコンベクスのレヴンで作られた塔と塔の間に泥の詰められた空間がある写真です。このような壁は60mほど続いています。先ほどの壁の間に詰められた粘土には当時の人が手でならしたような指紋の跡が見られます。これは貯水施設から水をとっている溝の写真になります。

オペレーション3の報告に移ります。このOHPの場所は遺跡の中央に位置しているので、私達は中央宮殿と考えています。そして、これはもともと右半分くらい小さかったのが、大きくなり、大きくなってからも、建築層が2枚あります。そして、いろんな機能の部屋が存在しています。これは上塗りを取った時のプラノコンベクスレンガの積み方です。これは今指したコーナーで2 mほど掘り下げた所で、これもプラノコンベクスのレンガによる飾り状のものが出てきました。これはオペレーション4の発掘に関わることですが、ここでいう重要なことは左側の角に粘土板文書風の粘土が貯蔵されています。このような構造はオールドバビロニアの時代に至るまで、同じような構造が続くようです。表層を50cmほど剥がしますと、表層の段階で壁のラインが出ているのですが、このような神殿が出てきました。これは後の時代に共通のプランを持っているようです。これを見て驚くことがあると思いますが、壁が地下7 mまで伸びているということと、あと壁と壁の空間には、天然の堆積物ではなく、意図的に丁寧に埋められた詰め物があ

るということです。先ほど説明したのですが、これは詰め物によって建物を修復したのか、再生する時の人為的なものか、他のものか、検討中です。

先ほどの神殿の側には20m、この遺跡で一番周りから高い部分がありまして、この中からいろいろ日常的な道具も発見されているのですが、このような神殿と高いマウンド、ジググラドかもしれない高いマウンドの位置関係の近いことに関しては、テル・リマーであるとかトゥクルティ・ニヌルタの遺跡でもあり、今いろいろ考えているところです。

これはオペレーション7ですが、ここではここを掘る以前からこの遺跡の中では表面にED3期の墓があって、ED2期の建物の下に食い込んでいることが判明し、墓の問題を解明する為にここを掘っています。この墓には死体に伴って、必ず一対の副葬品があります。あるいは女性の場合には装飾品等も副葬されています。アブ・サラピクとか他のシュメールの遺跡では同じようなものが出ています。

ED3期では、完形品の出土が多くて、非常に恵まれています。これはナツメヤシの絵が描かれています、ED3期にナツメヤシを描いているということで新発見に近い。これは凹みのあるディンプル・ウェアで、このような形は円筒印章の表現では、お酒を飲む時に使う倒れにくい器として描かれていますので、非常に面白い発見物です。これは面白いですが、いろんなモチーフが刻まれています。それでこれの描かれている丸が一つであったり、三つであったりするのは今後の研究課題であるということです。これは羊の像で、被熱で割れていますが、おそらく穴があって、もう一つと組み合わせて椅子の、アームチェアと言いますか、腕をかけるところだった部品だと考えられます。これは様々な石製品の中、表採品の中でも非常に重要なもので、轆轤の基部のものらしく、もしこれがオールドバビロニアの頃だとすると非常に珍しい事例になります。

(抄訳：大沼克彦)

ヨハナ G. ドニー  
イラク共和国文化省考古遺産庁調査研究局  
Donny G. Youkhanna  
Department of Research and Studies,  
State Board of Antiquities and Heritage, Ministry of Culture, Baghdad, IRAQ